

令和5年度お茶の水女子大学経営協議会〔第1回〕議事録

日 時：令和5年6月27日（火）15：00～17：05

出席者：（学外委員）五十嵐委員、河村委員、久能委員、小安委員、佐藤委員、篠塚委員、杉村委員、豊田委員、藤崎委員

（学内委員）佐々木学長、加藤理事、新井理事、石井理事、坂元理事、谷理事、赤松副学長、太田副学長、福本副学長（事務総括）

（陪 席）宮井監事、中野監事
曹副理事、齋藤副理事

新名文教育学部長、横川理学部長、小谷生活科学部長、
浅田大学院人間文化創成科学研究科長

- 議事に先立ち、今年度から新たに就任した小安重夫委員、豊田祐基子委員、福本浩一副学長（事務総括）の紹介及び挨拶、その他の委員の挨拶があった。

I. 議事録（案）の確認

記録内容及び大学ホームページへの掲載について、了承した。

II. 学長報告

1. 共創工学部意見伺いの結果について

佐々木学長及び新井理事より、資料に基づき、共創工学部意見伺いの結果について、設置を可とする回答がなされたことの報告があった。

III. 審議事項

1. 学長選考・監察会議委員の選出について

加藤理事及び福本副学長（事務総括）より、学長選考・監察会議委員の選出について、資料に基づき説明があり、審議の結果、五十嵐委員、河村委員、小安委員、篠塚委員、杉村委員の5名が選出された。

2. 令和4事業年度に係る業務の実績に関する報告書（案）について

坂元理事より、令和4事業年度に係る業務の実績に関する報告書（案）について、資料に基づき説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

豊田委員より、留学に関する数値目標及びTHE日本大学ランキング2023の順位に関する質問、小安委員より、卒業時の外国語力の判断指標、英語によるコースに関する質問があった。

続いて藤崎委員より、英語による授業を増やすことについて、一度に行うのは教員の転換など困難が多いので、長期目標として考えていく必要があるとの意見があった。

また、佐藤委員より、年次計画の項目として抽出された課題への取り組みについて、①各項目にプライオリティを付けること ②各項目にどのようなリソースを張るべきか（誰を責任者にすべきか）考えること ③各項目ごとにタイムフレームを作ることの3点が特に重要であるとの助言があ

った。

続いて篠塚委員より、進捗が遅れている取り組みについての質問があり、遅れている取り組みをどのような順番に置いてどのように取り組むかが重要であるとの意見があった。

3. 令和4年度決算について

加藤理事より、令和4年度決算について、資料に基づき説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

佐藤委員より、余剰資金の運用について確認があり、加藤理事及び近藤財務課長より、寄附金の余剰の範囲内で電力債と地方債を購入していることの説明があった。これを受け佐藤委員より、他大学では財務的な専門家をCFOとして雇用するなど、大学の財務を見直す動きがあることの説明があり、本学でも今後の問題として認識しておくことへの助言があった。

4. 令和6年度概算要求について

加藤理事及び福本副学長（事務総括）より、令和6年度概算要求について、資料に基づき説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

IV. 報告事項

1. 大学機関別認証評価自己評価書（案）について

坂元理事より、学校教育法に基づき、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構が実施する「大学機関別認証評価」を、本学が令和5年11月に受審予定であることの説明があり、関係資料となる大学機関別認証評価自己評価書（案）について、資料に基づき報告があった。

2. 国際交流データについて

石井理事より、国際交流データについて、資料に基づき報告があった。

①藤崎委員より、学生の英語能力向上を目標として明確にし、州立大学等も含むなどアメリカの協定校の幅を広げることにについて意見があった。②杉村委員より、留学生の受け入れ・送り出しの戦略についての質問、短期のプログラムを充実させることの助言があった。③佐藤委員より理化学系の留学生の受け入れに関し今後注意することとして、研究インテグリティの問題についての助言があった。これらの意見について石井理事より、①②について、本学ではもともと研究交流のある海外の大学を通じて学生交流を行ってきており、アメリカ・英語圏の協定校を増やすためにも、研究交流を活発化させていきたいこと ③について、倫理審査に関する周知を更に徹底することを検討中であることの説明があった。

また、久能委員より、英語力の向上について、国内でできることとして英語の授業が多い大学とのジョイントディグリーなどの提案があった。これについて石井理事より、本学での取り組みとして、「大学の世界展開力強化事業」では全て英語でクラスをオファーしていること、グローバルインターンシップ（日本人と英語圏の学生のペアで日本企業にインターンシップに出し、インターンシップ自体は全て英語で行ってもらうもの）を新たに開始することの説明があった。

3. 外部資金獲得状況について

石井理事より、外部資金獲得状況について、資料に基づき報告があった。

4. 女性学長サミット開催報告書について

石井理事より、女性学長サミット開催報告書の発行について、資料に基づき報告があった。

5. 令和4年度卒業生・修了者の進路状況について

新井理事より、令和4年度卒業生・修了者の進路状況について、資料に基づき報告があった。

6. お茶の水女子大学&ZMP 共催イベントについて

太田副学長より、お茶の水女子大学&ZMP 共催イベントについて、資料に基づき説明があり、各委員へ案内があった。

7. 同窓会館跡地整備事業について

福本副学長（事務総括）より、同窓会館跡地整備事業について、資料に基づき進捗報告があり、事業概要として、B00 方式で行うこと、本学の使用部分のイメージ（ギャラリーコーナー、150周年記念ホール、プロジェクトスペース等）、民間事業者からの提案の想定（オフィス、フィットネス施設、学校法人、マンション等）及びスケジュール等について説明があった。

8. その他

(1) 令和5年4月～6月における本学の主な活動について

赤松副学長より、令和5年4月～6月における本学の主な活動について、資料に基づき報告があった。

V. 意見交換

1. 今求められる工学系人材について

佐々木学長より、令和6年4月共創工学部の設置が認可されたことの説明があり、続いて新井理事より、共創工学部について、資料に基づき説明があった。それらをふまえて、今求められる工学系人材について、対話形式で意見交換を行った。

■学外委員からの主な意見等は以下のとおり。

小安委員：女性の研究者を増やしたいという強い思いがあるが、研究所等で人材を育てるにも、まず大学で育成した上でということになるため、お茶大で工学系の学部ができることはありがたい、応援したい。また、大学院については先のことだが、連携大学院のようなシステムで、国立研究開発法人の施設等を使うことができれば、学生の教育にも非常に役立つのではないかと。

河村委員：芸術文化の振興や、伝統文化の伝承という立場からの意見としては、新学部は、芸術文化、伝統的な文化と理工学を結び付けていける人材を育てられるところではないかと非常に期待をしている。文化や芸術では、作品を作り、それを鑑賞・享受する人々に結び付けること、その作品をアーカイブすること、作品の作り手・受け手を人材として育てること等、いずれの部分でも、最先端の技術をどう活かすかがとても大切な時代だと思っている。ま

た提案としては、共創工学部という言葉自体が、初めて聞く人にとっては難しいかもしれないので、中学生・高校生等に興味・関心を持ってもらえるよう、できるだけ分かりやすい言葉で、共創工学とは何かについて発信してはどうか。附属高校の生徒から発信してもらうのもいいのではないか。

久能委員：STEM教育についての意見として述べると、STEM系の教育を受けた人と、そうでない人とは、生涯賃金に大きな差があると言われているが、STEM教育においては、全ての女性がそこにアクセスする権利があり、それは特にコンピューター・サイエンスに関しても同様であると考えている。新学部についても、ほかの学部の学生もジョイントまで行かなくても、デュアルでも部分だけでもいいがアクセスできるようにし、何らかの形のサティフィケートが出せるようにしておく、就職時点で格差が付けられてしまうということがなくなると思う。

篠塚委員：今日（2023. 6. 27）の日経新聞の朝刊の記事（「18歳人口減でゆるむ大学入試倍率低下、国公立大でも」河合塾教育研究開発本部の近藤治主席研究員による意見について）によると、政府が理系女性を後押しする動きによるものだけではなく、女子学生たちは文理融合の形で理系分野に入っていくことに関心を持ち始めており、コロナ禍の不安な状況で将来を考え、理系・文系と分けるのではなくて、文理融合のような形の中できちんとした職業を持つということを考えて進路を選択しているとの分析があった。その状況は非常に大事なところで、お茶大はまさに、3学部の中から教員も学生も集めて新しいものを作ろうとしており、実際にそこで4年間学んだ人たちが、実際にどのようなところに就職できるのかという大きなテストケースになると思う。

佐藤委員：①理系の女性が少ないという入りの段階の話は、高校で理系女性が一遍に減るという傾向がはっきりしているが、大きな問題は出口にもあり、篠塚委員の発言にあったように、ロールモデルがしっかり組み立てられていないということである。これについては、今、人気があるシステムエンジニア、情報工学系人材が企業において不足していることに着目し、その人材を共創工学部が供給できるならば巨大なニーズがあり、言い換えればロールモデルを形成しやすいということなので念頭に置いておく必要がある。それはお茶大の外部資金の獲得という面でも、産業界との連携につながる可能性があるので大事なポイントかと思われる。

②特に人間環境工学科に関しては、当該学科の知見、特に理系のノウハウ（圧倒的な科学力、物理の理科学力等）として十分ではない部分が見込まれるため、ほかの大学との協働を当初からイメージした運営としてはどうか。お茶大は東大と覚書を結んでおり、東大の物理学、理化学等と共創工学部のコラボレーションを考えることは、お茶大の特色を活かすことにつながると思われるため、ぜひ検討していただきたい。総合知の議論をすると、専門知と専門知を合わせるコーディネーターが日本にはほとんどいないため、その人材を育成することでも、お茶大としての特色が出せるのではないかと思う。

③海外の同じような学科を持っている大学とのコラボレーションも、また決定的に重要だと思う。

豊田委員：工学系理系の女性を育てるといえるとき、「リケジョ」等というような話があって、これを増やそうということになっているが、最終的な目標は「〇〇ジョ」というところを超えて、

ジェンダーは別として、お茶大のここに入りたい、と男性も思うような学部をどう作っていくのかというところになると思う。その意味では、グローバル女性リーダーというところと、目指すキャリアに若干ギャップがあるのかも感じ、もう少し広がりがあるところをどう示していけるかということだと思う。工学、AI、STEMの分野において女性の特色を出して生きていける、能力を発揮できるという、新しいルールを作っていく、そういったルールメイキングをこの学部ができるのだといったことを、一つ授業の中に取り入れていただきたい。女性が主導権を握れる、リーダーになれるようなルールメイキングを、どう技術、工学を使ってやっていけるのかといった議論には、他大学、他学部との連携授業も必要かもしれないが、その観点も取り入れてほしい。

藤崎委員：共創工学部を作り、はっきりと新しい理系を強くしていくのは非常にいいことだと思う。リーダーを作っていく上で、弁護士等の何かの資格を持った人材を文系でも理系でも育てていくことが必要であり、また英語を強くしていくことが、リーダーを作る意味で極めて大事であると思われる。

また、当該会議の資料について、詳しい資料とは別に説明用の資料は数ページにまとめ、そこに焦点をあてて説明するのも一案かと思われる。

■本学からの主な回答・発言は以下のとおり。

新井理事：共創工学部の学生が外の学部を2つ目のプログラムとして取ることについては認可されたので、この次は、他の学部が共創工学部のデータサイエンス的な工学的思考を2つ目のプログラムとして自由に取れるような仕組みも検討したい。また、サティフィケートが非常に重要だということはよく理解したので、その点も、目に見える形にしていきたい。

佐々木学長：皆様からの貴重なご意見に感謝する。説明資料の簡略化については、今後の会議運営の参考にさせていただきたい。

VI. その他

佐々木学長より、閉会の挨拶があった。

以 上